

## フクシマ連帯キャラバン参加報告書

今回初めて、フクシマ連帯キャラバンに全日程通して参加することができました。以前参加したキャラバンは前半のみの参加だった上、2019年と5年前の参加だったので自分の中では初参加に近い心持ちで挑みました。

私が過去フィールドワークで見たことのある撤去されないままの除染土のフレコンバックや、震災で倒壊したまま放置され、廃墟となってしまった民家といった凄惨な傷跡が今年のフィールドワークの際にはほとんどなくなっており、段々と復興が進みつつあるように思えました。しかし実際は只々撤去が進んでいるだけであり、実際にそこに住んでいた住民の方や、その地域で営まれていた人々の生活、その地域に根付いていた文化は未だに復興の目処は立っておらず、今も尚原発事故の被害というものは続いていました。今回のフィールドワーク先にあった浪江町の諸戸小学校は改修されて震災や津波の恐ろしさを後世に残す資料館のような形として変わっていたのが印象的でした。双葉町にある原子力災害伝承館は原発事故で起こった事が事細かに記録されていました。

キャラバンの後半に行った今回の茨城要請行動では、東海第二原発の近隣の自治体を回りました。先の能登地震において道路が寸断されて広域避難計画が机上の空論になっている点、フィールドワークで見た通り原子力災害は何が起こるかわからないので、早急に廃炉とし再稼働に反対するように要請を行いました。しかし各自治体からの反応はあまり良いものではなく、質問の回答もほとんど言葉を濁されてしまいました。しかし、キャラバン隊という存在や行動は認知されているなという手ごたえを感じたので、今後も続けていく必要があると思いました。

県民集会に参加していた高校生平和大使の方や、今回交流のあった東北地方青年部の方の中にも、震災当時かなり幼かった為、当時の記憶が曖昧、あまり覚えてないといった方が増えてきているなと感じました。我々全港湾青年部はフクシマ連帯キャラバンという行動を通じて、当時の状況や原子力災害の悲惨さを誰よりも学んできた知識と経験があります。今後はこの知識と経験を、後輩世代にも伝えていき「原発事故を風化させない」という今年のテーマの通り、放射能の危険性をもっと伝えていかなければいけないと思いました。

最後になりますが、今回のフクシマ連帯キャラバンは私の中でも大いに成長ができたと感じ、何より全国の仲間との団結を感じられた貴重な5日間でした。開催して下さった東北地方青年部の皆様、行動を共にした全国青年部の皆様、本当にありがとうございました。

全港湾名古屋支部青年部書記長 羽賀 達也